

## (研究内容)

### 1. はじめに

名古屋港は、庄内川や木曾三川などの大河川やその他の中小の河川が流入する遠浅の海である、古くから浚渫と埋め立てを繰り返しながら港湾整備を進め、地域の産業・経済のみならず我が国の経済の発展に貢献してきた。今後も地域の産業を物流面から支えるための港湾整備が必要とされる一方で、近年の地球環境問題により、温室効果ガス削減をはじめとした環境負荷の軽減、生物多様性に配慮した自然環境の積極的な保全とともに、人々が水辺で親しむことのできる親水空間の拡充が求められている。

こうしたことから、臨海部埋立地では、工場の緑化推進あるいは大規模公園緑地の建設、緑地帯の整備など積極的な緑化計画が実施されており、既成市街地で見られない規模で新たな樹林地が形成されている。実際、名古屋港においては、身近に親しまれる港湾環境の創出とともに、生物多様性に配慮し、港湾開発、港湾事業に伴う環境負荷軽減を図るために、平成30年代後半を目標に339ヘクタールの緑地が計画されている（名古屋港管理組合 2019）。

臨海部の厳しい自然状況の中で植栽計画が実行し得た背景は、長年の経験とともに、昭和40年代以降実施された臨海埋立地における多くの植栽に関する研究の成果があったためである。樹種の選定、植栽方法、植栽地盤の土壌改良などに関して多くの研究が進められた。

しかし、実際の施工が行われる場合には植栽場所に関する環境調査やそれに合った樹種選定が充分に行われていないこと、費用面などの問題から植栽後の維持管理が充分に行われていないことなど様々な要因により、外観的にも樹木的にも健全な状態でない公共緑化空間が数多くみられる（岩崎ら 2001）。

また、臨海部の樹林管理については、海岸保安林を対象とした研究が進められてきているが、**新たに造成された埋立地での事例は極めて少ない**。初期植栽時における塩分や潮風に強い樹種の植栽がみとされるべきであるが、**埋立地で土壌改良されていることから、どんな樹木でも育成できると考えられて植栽されているため、未だ研究事例がほとんどない**。そのため埋立地における樹木の生育特性を多面的に明らかにすることが不可欠である。特に今後の維持・管理方法に対する指針を検討するためには、**現存の樹木の生育実態を把握し、その特性を立地条件に照らして検討し、評価することが重要である**（葉山ら 1987）。

これに関しては名古屋港に位置する富浜緑地も例外ではない。名古屋港においては「港の景観づくり」が重要と考え、以下の基本目標を掲げている。

- ・産業や生活を支える、活力あふれるみなと
- ・楽しさ、賑わいのあるみなと
- ・世界への夢が広がるみなと
- ・水・緑・生物とふれあい、安らぎを感じるみなと
- ・歴史の奥行きを感じるみなと

富浜緑地はこの目標に向けての政策の一環としてつくられた緑地であり、1986年に植栽が開始された（名古屋港管理組合 2017）。

富浜緑地において、初期植栽時の樹種名、植栽位置については記録がされているものの、それ以降の樹木の生育実態に関しては一度も調査が行われていない。まずは現在の樹木の有無、樹高、胸高直径等の生育量に関するデータを集めることにより、実態を把握しなくてはならない。実態を把握すること、それに加えて、環境要因として土壌環境の調査も行うことにより、樹種の選定、あるいは植樹位置、方法等の課題を見つけることが可能であると考えられる。

そこで、本研究では富浜緑地において、環境要因と樹木の生長量に関して調査を行うことで、得られたデータをもとにその土地に適した植栽、あるいは維持・管理を行うことのできるような指針を定めることを目的とする。